



図44 第293-10次調査区と周辺の遺構平面図

2. 第293-10次調査

東院地区駐車場整備工事に伴い、排水路計画地を掘削したところ表土直下で地山面が現れたので、急遽、発掘調査することとなった。調査範囲は工事で掘削した東西40m強、南北約1mである。この場所は第39、43、243、245-1次調査区に囲まれた中の未調査地であり、本整備前は仮駐車場としていた。その際、旧耕土は大部分取り去られ、遺構面直上にかろうじて旧耕土または床土の一部が残っている状況であった。遺構面は地山である大阪層群の砂礫層または粘土層である。しかし、この面に掘られた柱穴の残存深さから見て、検出した地山面自体すてにある程度の削平を受けている。

検出した遺構は、奈良時代の柱穴5箇所と古墳時代の溝もしくは土坑1箇所である。

柱穴1は掘方の径60cm、柱痕跡の径20cmで、残存深さは20cmに満たない。東西につづく柱穴がないことから、南北方向の堀の一部かと考えられる。

柱穴2、3、4は調査区東部南辺に並ぶ柱穴群である。掘方の径50~80cmで、掘方内には奈良時代の瓦片や凝灰岩片が含まれており、平城宮の建物の柱跡であろうが、これらが同一の建物か否かは不明である。

柱穴5は柱穴4の北にあり、掘方が北壁にわずかにかかって検出された。北壁部分での径は75cmである。

古墳時代かと考えられる溝もしくは土坑は調査区東半部にある。幅約7m、検出した深さ40~50cmで、西辺はほぼ南北方位に合うが、東辺は北で東へ約56度傾く。人為的に掘られた凹みを、おそらく平城宮の造営時に埋めたものであろうが、この埋め立てに際し、近くにあった古墳を壊し、その埴輪をまとめてこの中へ投棄している。埴輪は溝中央部に集中しており、敷並べたように面をなす部分もあった。埴輪は円筒、家形、朝顔形などで5世紀中頃を中心とする。少量ではあるが須恵器、土師器もある。また、埋土の最下層である茶褐色粘質土からはサヌカイト製の国府型ナイフ形石器（長さ約5cm）1点が出土した。

（高瀬要一）

平城専らむ欄

◆「平城宮跡発掘見学会」顛末記

1998年4月に朱雀門・東院庭園復原記念イベントが盛大に行われ、平城宮内は大いに賑わった。その中で、第292次調査現場も、「平城宮跡発掘見学会」と称するイベントに組み込まれ、當時、見学者を受け入れた。

この期間中の平日2回、現場担当者が調査の概要を説明することになった。

しかし調査は始まってまだ半月足らずで、話のネタがない。頭をひねったあげく、調査の手順を説明したり、遺物に触れもらったりしてみた。ところが苦肉の策が意外にも好評。特に土が付いたままの遺物は臨場感抜群で、百の言葉に勝る。マスコミにも取り上げられ、結局期間中に数千人の方々が現

場を訪れた。

お客様の反応は様々。説明を熱心に聞く人、遺物に触るだけであっさり帰ってしまう人、中には壮大な自説を蕩々と語り出す人も…。ともあれ、人前で話すことに不慣れだった現場担当者には貴重な経験になりました。（S）